

日付: 2025-10-10

互換性: v1.95R5 / v2.0 / v2.0R1 (Expert / Grad Postdoc Companion / Reviewer Addendum) / v2.1 / v2.2 / v2.3 / v2.3R1 / v2.4 / v2.4R1 と**後方互換** (定義は不変、キーは上位互換)

**今回の更新趣旨 (v2.4R2) **

第2稿の批判的レビューを受け、**(A)** TG Ind の**検証可能化** (プロトコル追加)、**(B)**

ホロノミー**下界の誤差予算を可計算化** (式と係数・校正手順)、**(C)** **外挿失敗検出の閾値校正** (ROC 必須化・系

KMS/Tomita-Takesaki 整合の**実用化** (フォールバック方針と検査アルゴリズム)、**(E)** **API 型定義とエラー

クイックスタートと**MWE**、**(G)** **計算コスト・スケーリング報告**の定式化、**(H)** **感度分析の具体化**、

の収束規約**を**Normative**に格上げ。

また、レビュー本文に対する**内部批判的レビュー**を実施し、**要求過剰・不必要な一般性・実装負担の偏り**を是正した

0. クイックスタート (実装者向け)

1. `ATLAS_thresholds_v2.4R2.json` を読み込む (必要なら `schema_migration` で旧版をアップリフト)。
2. **外部アンカー**を `provenance` に記録: `source_type/id_or_doi/version_or_date/method/ci_95`。
3. **TG Ind 検証**を § 1.3 のプロトコルで実行 (結果を JSON Lines に出力)。
4. `run_pipeline(cfg, data)` を実行 (§ 5 の API 型定義に準拠)。
5. 出力 JSON Lines を **バリデータ (付録 I) **で検査 (/N/H/SG/Determinism/ROC)。
6. **TPR/FPR/AUC/best J** と **コスト表**を論文 / レポートへ転記。

1. 前提と立場 (循環回避の実装可能化)

1.1 A0 TG と の時間独立性 (再掲)

(TG Ind): パラメタ多様体 (Λ) 上の可積分分布 $(\mathcal{D} \subset T/\Lambda)$ を、時間ベクトルと**独立**に構成し、 $(X_t \notin \mathcal{D})$ 、 $([\mathcal{D}, \mathcal{D}] \subseteq \mathcal{D})$ 。 (\mathcal{D}) の葉を **

1.2 誘導時間 (付録 D) — 存在は局所・仮定依存 (ギャップ明記)

1.3 **TG Ind 検証プロトコル (新・Normative) **

入出力

入力: パラメタ空間記述 ``, 候補時間方向 `X_t`, 保存量 / 幾何量のセット `I = {I_k}`。

出力: `TG_Ind_Result = {status PASS|FAIL|UNCERTAIN, D_basis, frobenius_resid, orthogonality, notes}`。

**手順 (疑似コード) **

```python

def verify\_TG\_Ind(Lambda\_desc, X\_t, invariants):

# 1) 候補分布 D の構成: I の共レベル集合の接空間を張る基底 {b\_i}

D\_basis = build\_tangent\_basis(invariants) # の chart ごとに数値/記号で構成

# 2) 可積分性 (Frobenius) を有限差分で評価:  $\| [b_i, b_j] - \sum_k c^k_{ij} b_k \|_{\text{Frob}}$

frob = finite\_diff\_frobenius(D\_basis)

```

3) 時間独立性: max_i | X_t, b_i | _orth (計量が無ければ同次座標内積)
orth = max_inner_product(X_t, D_basis)
4) 判定
if frob _Frob and orth _orth: status = "PASS"
elif frob > 10* _Frob or orth > 10* _orth: status = "FAIL"
else: status = "UNCERTAIN"
return TG_Ind_Result(status, D_basis, frob, orth)
``,``,``

既定値:` _Frob=1e-3`,` _orth=1e-6` (HPC: 厳しめ)。閾値は`trriage.roc`の校正に従い系別に更新可。
ログ : 判定根拠 (`frob, orth, invariants, charts`) を JSON Lines へ必記。

2. 基礎定義の集約 (再掲 + 微修正)
- **CPTP 主束・接続・曲率** (Stinespring Ehresmann 接続)。
- **_chart** : HS 基準 / op 換算 ; `T^+` は **Heisenberg 双対** 。
- **N_mod** : 幾何 () と熱 (KMS) 経路。
- **H_top** : 辞書接続ホロノミー。

3. 規格 (Normative) — **下界の誤差予算を可計算化**

**定義 (保守的下界) **
/[
H_{ / \mathrm{lb}} = / \max / \mathrm{Bigl}(0, /; H_{ / \mathrm{obs}}\}
- E_{ / \mathrm{disc}}\}
- E_{ / \mathrm{loc}}\} (/ \Delta)
- E_{ / \mathrm{resp}}\} (| / \delta N|) / \mathrm{Bigr}).
/]

3.1 誤差予算の算出式 (新)
- **離散化** : `method="richardson_remainder"`,`order=2`
 / (E_{ / \mathrm{disc}}\} = s_f / , / \frac{|H(2a)-H(a)|}{(2^p-1)} /), 既定 / (p=2 /), 安全率 / (s_f=1.5 /)。
- **局所誤差由来** : `functional_form="linear"`
 / (E_{ / \mathrm{loc}}\} (/ \Delta) = c_{ / \Delta} / , / \Delta /), 係数 / (c_{ / \Delta} /) は **校正系** で回帰し、`profiles.*`
 に格納。
- **応答誤差由来** : `functional_form="linear"`
 / (E_{ / \mathrm{resp}}\} (| / \delta N|) = c_{N} / , | / \delta N| /), 係数 / (c_N /) も同様に校正。
校正手順 : 校正データで / ((/ \Delta, | / \delta N|, H_{ / \mathrm{obs}}\}) /) を収集 既知のカーブで **下側回帰** (Qu
0.1) 係数を決定。
運用 : 係数は JSON に明示 ; 未設定時は **保守的上限** (大きめ係数) を適用。

4. 統計・数値安定性

4.1 外挿失敗検出 (根拠の付与)
- `N_mod.extrapolation_guard.order_agreement_tol` と `oscillation_max` は、**校正 ROC** により決定。
- **必須出力** : AUC / best J 閾値 / 95% CI / 係数の系別推奨 (spin/boson/fermion) 。

```

### ### 4.2 ROC 校正の運用

- `**K fold**` ( `k = 5` ) で ROC を安定化、`**外部検証セット**` ( 例 : XXZ/Hubbard ) で転移性を評価。
- ``triage.report.required=true`` ( 既定 )。 ``triage.roc`` に `kfold/外部セット DOI` を記録。

---

### ## 5. 実装 API ( 型定義・I/O・エラー規約 )

```
```python
from typing import TypedDict, Literal, Any

class DensityMatrix(TypedDict):
    dim: int
    data: list[list[complex]]

class Operator(TypedDict):
    dim: int
    data: list[list[complex]]
    name: str

class SystemState(TypedDict):
    params: dict[str, float]      # 物理パラメタ ( J, h, ... 等 )
    rho: DensityMatrix | None     # 状態 ( または None )
    channels: dict[str, Any] | None # CPTP チャネル表現 ( Kraus 等 )
    observables: dict[str, Operator] # 計測する O

class StageResult(TypedDict):
    stage: Literal["sg", "delta", "nmod", "htop", "triage", "roc", "tg_ind"]
    status: Literal["PASS", "WARN", "HALT", "INCONCLUSIVE", "ERROR"]
    metric: str | None
    value: float | None
    threshold: float | None
    aux: dict[str, Any]
    notes: str
    timestamp: str
```

```
class AtlasConfig(TypedDict): ...
```
```

#### **\*\*例外と継続方針\*\***

- ``AtlasConfigError`` `**即中断**`。
- ``AtlasComputationError`` ``StageResult{status="ERROR", aux.continue=false}`` で停止。
- ``RecoverableError`` ``status="ERROR", aux.continue=true`` で次段へ進む。

**\*\*並列実行\*\*** : ``determinism.parallel_mode="counter"`` を推奨。 ``aux.thread_id/seed`` を必記。

---

### ## 6. 計算コストとスケーリング ( 報告を義務化 )

- **理論オーダー** :  $/(O(R d_r^2) /), N: /(O(K B S) /)$  ( 次数×ブートストラップ×サンプル ), H: ループ×解像。
- **実測報告** ( 必須 ) : `system\_class, N, d\_r, bootstrap, loops, resolutions, wall\_time\_s, env\_hash`。
- **スケーリング推定** :  $/(T / \text{approx } / \alpha N^p B /)$  を **対数回帰** で報告 ( 係数・p の CI を付与 )。

---

## ## 7. 実証パッケージ ( 必須レポート )

- **TPR/FPR/AUC/best J/CI**、**三面ダッシュボード** (  $/N/H$  ) を必須。
- **外部検証** : 転移性を示す ROC を1系以上 ( XXZ/Hubbard 等 )。

---

## ## 8. 制限とフォールバック

- **TG Ind 非確定** : `status=UNCERTAIN` のままでも **運用可** だが、A0 TG の主張は **弱化**。
- **KMS 整合が崩れた場合** : `kms\_policy="geometric\_only"` にフォールバックし、N\_mod は幾何経路のみ ( `WARN` )

---

## ## 9. 物理的解釈と例

### ### 9.1 **CPTP 曲率例** ( 振幅減衰 × 位相回転 ) — 実装スケッチ

- ループ順序差による出力差を **非可換性** ( 曲率 ) の指標として可視化。
- 付録 L に **Python スケッチ** ( Qiskit/QuTiP 相当 API ) を掲載 ( 実測値は環境に依存 )。

### ### 9.2 **KMS/Tomita–Takesaki** — 反例とフォールバック

- 反例 : 局所モジュラー流と接続が可換でない単純模型を提示。
- 方針 : `kms\_compat\_test` が失敗時、**自動的に** `geometric\_only` へ降格。

---

## ## 10. 内部批判的レビュー ( 本レビューバックへの所見・要約 )

- **TG Ind の「検証不可能」主張** は妥当だが、**有限差分 Frobenius と直交テスト** で **実務プロトコル** 化可能 ( 完璧な )
- **下界係数の不明瞭性** の指摘は正当。 **定式化 + 校正法** を規格に昇格。
- **閾値根拠** は ROC 必須化で解消。過度な系普遍値の強要は避け、**系別プロファイル** で管理。
- **KMS 整合** は理論的に要求が強すぎるため、**フォールバック指針** を用意。
- **API 不備** は型定義・例外規約で補完。
- **ドキュメント膨張** にはクイックスタートで入口を整備。
- **具体例の数値** は再現環境依存であるため、**コードと評価手順** を優先提示。

---

## ## 付録 H: スキーマ移行 ( 更新 )

( v2.4R1 と同様、v2.4R2 で追加されたキーを自動補完 )

## ## 付録 I: 自動バリデータ

P1 ~ P5 に加え、**P6 ( TG Ind )**、**P7 ( 誤差予算の係数設定 )**、**P8 ( ROC 校正の存在 )** を追加。

## ## 付録 J: KMS/Tomita – Takesaki 整合

十分条件・反例・`kms\_compat\_test` と `kms\_policy` の仕様。

## ## 付録 K: ノルム橋渡しベンチ（更新）

`op\_probe` の\*\*再試行/restarts\*\*、\*\*非収束時の扱い\*\*（`INCONCLUSIVE` or `WARN`）を定義。

## ## 付録 L: MWE（最小動作例）

- \*\*TG Ind 検証\*\*呼び出し例
- \*\*パイプライン\*\*実行例
- \*\*ROC レポート\*\*の JSON Lines 例

---

## ## 変更履歴（v2.4R1 → v2.4R2）

- TG Ind 検証プロトコルを\*\*規格化\*\*（`\_Frob/` `\_orth` とログ仕様）。
- ホロノミー下界の\*\*誤差予算\*\*を\*\*可計算化\*\*（Richardson 残差 + 線形係数 + 校正法）。
- 外挿失敗検出の\*\*ROC 校正\*\*と\*\*系別推奨値\*\*を導入。
- \*\*KMS 整合\*\*に\*\*反例 + フォールバック\*\*（`kms\_policy="geometric\_only"`）。
- \*\*API 型定義 / エラー規約\*\*を追加、\*\*クイックスタート / MWE\*\*を整備。
- \*\*コスト・スケーリング報告\*\*と\*\*感度分析\*\*を規格化。
- \*\*op probe\*\* の\*\*収束規約\*\*（restarts/on\_nonconverge）を明記。